

マイノング主義における truthmaker としての事態

小関 健太郎 (Kentaro Ozeki)

慶應義塾大学

哲学的論理学や存在論 (形而上学) において、マイノング主義 (Meinongianism) は非存在対象や不可能対象を含む広範な対象のクラスを認める一種のメタ形而上学的立場であり、この立場に基づく諸理論は言語、志向性、フィクションなどに関する問題の分析に用いられている。

近年、不可能世界や不完全世界を含む、広義の可能世界論に基づくマイノング主義的な形而上学 (様相マイノング主義) が提案され、上記のような諸問題に関する体系的な立場のひとつとして積極的に検討されている (Priest 2005/2016)。可能世界論を基盤としてマイノング主義を展開する動機のひとつは、対象の性質や存在に関して、その対象が置かれる文脈も合わせて考慮することである。例えば、シャーロック・ホームズに関して通常想定される文脈はコナン・ドイルが描写した物語の世界であり、この世界においてホームズはロンドンに住んでいるが、現実世界という文脈においてはそうではないように思われる。これに対して、マイノング自身もしばしば例に挙げた「黄金でできた山」や「円形の四角形」のような対象は文脈を欠いているか少なくとも限定的であり、このような対象は裸の対象 (bare objects) や孤立した対象 (isolated objects) とも呼ばれている (Sylvan 1995, Griffin 2018)。

様相マイノング主義においては、(明示的に記述されていない内容を含めた上で) 文脈に関して限定的な対象は不完全世界における対象として説明することができる。しかしながらそもそも対象にとっての文脈として主であるのは、完全な可能世界よりも不完全世界であるようにも思われる。Griffin の例を用いれば、例えばあるジョークに登場する人物に関して、その人物の置かれている文脈を「ジョークの世界」と呼ぶことは奇妙である (*ibid.*, p. 526)。こうした問題はマイノング主義に関して、世界を基本的な要素とする理論とは別に、世界より小さい要素に基づく理論の可能性を示唆する。このような要素として、本発表では事態 (state of affairs) を取り上げる。

本発表の目的は、様相マイノング主義の動機を踏まえつつ、理論的には世界ではなく事態を基本的な要素とすることで、事態に基づくマイノング主義的な形而上学を提示することである。発表ではまず、マイノング自身の事態論と、それに基づく Simons (1992) の理論に着目する。Simons はマイノングの事態論を 4 値論理 (体系 FDE) として再構成しているが、同等の体系の意味論は Kripke 意味論的にも構成することができる。この意味論の拡張として、意味論的には Priest らの様相マイノング主義と同等の体系に対応する理論が得られるが、事態に基づくマイノング主義の意義は、さしあた

り論理的なものというよりもむしろ形而上学的なものである。発表ではこの点を、**truthmaker** としての事態という観点から論じる。

Griffin, N. 2018. “Why Item Theory Doesn’t (Quite) Go Far Enough”. In: Routley (2018).

Priest, G., 2005. *Towards Non-Being*. (2016, Second Edition). Oxford University Press.

Simons, P., 1992. “Lukasiewicz, Meinong, and Many-Valued Logic” (1989). In: *Philosophy and Logic in Central Europe from Bolzano to Tarski*. Springer.

Sylvan, R., 1995. “Re-Exploring Item-Theory”. Reprinted in: Routley (2018).

Routley, R., 2018. *Exploring Meinong’s Jungle and Beyond*, The Sylvan Jungle, vol. 1. Ed. By Eckert, M., Springer.

本研究は JSPS 科研費 JP20J22514 の助成を受けたものです。